

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第22回研究集会

平成14年 6 月 6 日(木)

研究発表

1. 寝たきり高齢者の社会参加を可能にする支援システムの構築

— 社会参加は困難と考えられていた障害者の社会参加を可能にした4事例の検討から —

川崎医療福祉大学大学院	医療福祉学研究科	医療福祉学専攻（博士課程）	○塚原 貴子
川崎医療福祉大学	医療福祉学部	医療福祉学科	佐々木正美
	関西国際大学		宮原 伸二

2. 在宅重症心身障害児の社会的支援に関する医療福祉学的研究

川崎医療福祉大学大学院	医療福祉学研究科	医療福祉学専攻（博士課程）	○吉野 千晶
	志学館大学	法学部 法律学科	近藤 功行
川崎医療福祉大学	医療福祉学部	医療福祉学科	末光 茂

3. ラット組織中タウリンおよびヒポタウリン定量法の検討とその応用

川崎医療福祉大学大学院	医療技術学研究科	健康科学専攻（博士課程）	○中村 博範	
川崎医療福祉大学大学院	医療技術学研究科	臨床栄養学専攻（修士課程）	八木 潤	
川崎医療福祉大学	医療技術学部	臨床栄養学科	木坂 純子	得能由美子
			柳楽真理子	森野 勝也
				産賀 敏彦

4. 大学生を対象とした遠泳実習における疲労について

川崎医療福祉大学大学院	医療技術学研究科	健康体育学専攻（修士課程）	○藤原 有子	
	岡山大学	特殊教育特別専攻科	星島 葉子	
川崎医療福祉大学	医療技術学部	健康体育学科	矢野 博己	田島 誠
			木村 一彦	

5. 読書時の外眼筋筋電図

川崎医療福祉大学	医療技術学部	感覚矯正学科	○前田 史篤	木村 久
			田淵 昭雄	

6. 後天性上斜筋麻痺の身体平衡機能評価

川崎医療福祉大学	医療技術学部	感覚矯正学科	○難波 哲子	深井小久子
			星原 徳子	前田 史篤

学会運営委員長挨拶 寺尾 章 教授

研究発表要旨

寝たきり高齢者の社会参加を可能にする支援システムの構築
 — 社会参加が困難と考えられていた障害者4事例の検討から —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 塚原 貴子
 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 佐々木正美
 関西国際大学 宮原 伸二

寝たきり高齢者の社会参加を可能にする支援システム構築にむけての基礎的研究として、社会参加は無理であると考えられていた障害者の社会参加を可能にしている要因を検討した。対象は、重症心身障害者の通所施設「朋」、ノースカロライナの自閉症のTEACCHプログラム、脳性マヒ者の「青い芝の会」、アメリカのIL（自立生活）運動の影響を受けた全国自立生活センターの活動の4事例である。障害の異なる対象にも関わらず社会参加を可能にして

いた共通点として、社会参加がいかに重要であるのかを明確な理念、人間観として持っていた。専門職の支援のあり方を問っていた。対象者の個々の問題を幅広く捉え優先順位が決められるゼネラリストや同様の機能をする存在があった。障害者の要望を聞く行政の柔軟な態度があった。障害や発達段階の違いにより社会参加を可能にした原動力となるメンバー、具体的な支援、活動に違いがあるが力強い原動力となる人がいた。

在宅重症心身障害児の社会的支援に関する医療福祉学的研究

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 吉野 千晶
 志学館大学 法学部 法律学科 近藤 功行
 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 末光 茂

重症心身障害児をめぐる医療福祉体系は、医療上の必要性や家庭での困難さなどから約25年間、施設入所が中心であった。しかし、1981年の国際障害者年を契機に、在宅・地域生活を目指すことが重要であると考えられるようになった。そのような中、1990年、川崎医療福祉大学（以下、本学）の学生を中心に、一人の在宅重症心身障害児（以下、重症児）をサポートする活動が本学で始まった。当初は6人で

スタートした活動も今では卒業生55名、現役本学学生17名により、レクリエーションを中心とした活動を行うまでとなった。

本研究においては、この本学サークル「あゆ組」の活動において、卒業生55名が学生という立場でどういった疑問、課題を持ちながら在宅重症児との関わりを持っていたのかを調査し、今後、地域社会とどのように関わりを持つことができるかを検討した。

ラット組織中タウリンおよびヒポタウリン定量法の検討とその応用

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 中村 博範
 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 臨床栄養学専攻 八木 潤
 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 木坂 純子 得能由美子
 柳楽真理子 森野 勝也
 産賀 敏彦

動物組織における含硫アミノ酸の代謝とその生理作用を明らかにするため、組織中タウリンおよびその前駆体であるヒポタウリン含量の定量法の検討を行った。尿中タウリンの定量は、タウリンをダブシルタウリンとしたあと逆相クロマトグラフィーで分析してきた。その条件でヒポタウリンをダブシル化した場合、タウリンへの酸化が大きかったが、ダブシルクロライド濃度を低下させることでその酸化は抑えられ、また、反応温度を低下させることで効率よ

くダブシル化を行うことができた。組織からの抽出操作はアセトンを用いた除タンパク法で行った。この条件下で測定した各組織（肝臓、腎臓、心臓、脳）でのタウリンおよびヒポタウリン含量（ $\mu\text{mol/g}$, $n=5$ ）は、それぞれタウリンは 1.58 ± 0.50 , 10.71 ± 1.18 , 27.52 ± 3.03 , 6.34 ± 0.80 で、ヒポタウリンは 0.18 ± 0.13 , 0.36 ± 0.11 , 0.11 ± 0.06 で、脳では検出されなかった。

大学生を対象とした遠泳実習における疲労について

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康体育学専攻

岡山大学 特殊教育特別専攻科

川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

藤原 有子

星島 葉子

矢野 博己 田島 誠

木村 一彦

安全な遠泳実習を行うにあたり、学生の疲労状態を把握することは大変重要である。そこで本研究では、水泳技能（400m 平泳ぎ記録）に基づく班編成と疲労との関係について 1. 自覚疲労調べ 2. 特定不安アンケート、状態不安アンケート 3. 体表温度変化から検討を行った。その結果、遠泳実習中に自覚疲労を訴える者は少なかったが、その中でも女性または水泳技能の劣る学生を中心に、自覚疲労

を訴える集団が観察された。また、水泳技能の低い学生ほど、実習直前の状態不安が高い傾向であった。さらに、水泳技能の低いグループの中でも体脂肪率の低い学生ほど体表温度低下が観察された。以上の結果から、400m 平泳ぎ記録、体脂肪率、状態不安、自覚疲労調べを実施することは学生の疲労状態を把握し、より安全な遠泳実習を行う上で、有効な調査となりうる可能性が示唆された。

読書時の外眼筋筋電図

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科

前田 史篤 木村 久

田淵 昭雄

日常的視活動である読書を行っている時の両眼性眼球運動を赤外線眼鏡型眼球運動記録装置 Ober2 と赤外線 8 mm ビデオカメラで同時記録（実験 1：対象 15 名/20.7 歳）した。さらに reading muscle の電氣的活動（水平 4 直筋両眼同時記録）について外眼筋筋電図（実験 2：対象 2 名/24・25 歳）より検討した。

実験 1 では、読書時の眼球運動波形は saccade と fixation の繰り返しである基本的な staircase pat-

tern を描いたが、各眼運動量は必ずしも一定ではないことが明らかとなった。

実験 2 では、作働筋作用方向への saccade 時に高頻度バースト放電が生じ、それに先行して拮抗筋では電氣的活動が inhibition されていた。fixation 時は tonic neuron 由来と推定される持続性の放電を認め、これらの反応が saccade と fixation を緻密にコントロールし、staircase pattern が成立するものと示唆された。

後天性上斜筋麻痺の身体平衡機能評価

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科

難波 哲子 深井小久子

星原 徳子 前田 史篤

<目的>後天性上斜筋麻痺の身体平衡機能を視能矯正前・後で評価した。

<対象および方法>後天性上斜筋麻痺の中老年 8 例、若年 7 例について身体平衡機能測定装置 Balance Master MPS-1102 (NeuroCom®) を用い、静的および動的な身体平衡機能を測定した。

<結果>視能矯正後の静的身体平衡機能は開眼および閉眼時の重心位置偏位量の改善、動的な身体平衡機

能は特に中高年の後方への重心位置偏位量の改善が認められた。

<考按>視機能および身体平衡機能の改善は、低下した外眼筋自己受容器の活動性の変化が促進され、眼球運動と身体平衡機能に影響したためと推察した。身体平衡機能は自覚症状を客観的に評価できる方法であると考えた。